

参考資料1. 国の動向と全国的な子どもの読書に関する実態

課題認識

平成13年制定の「子どもの読書活動の推進に関する法律」および、平成14年に閣議決定された「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」では、すべての子どもがあらゆる機会と場所において、自主的な読書活動ができるように積極的に環境整備を行うよう定められた。このような動向の中、まちづくりの特色として子ども図書館を整備する自治体が増えてきた。

平成30年4月に閣議決定された「第四次子供の読書活動の推進に関する基本的な計画」では、以下の方向性が示されている。

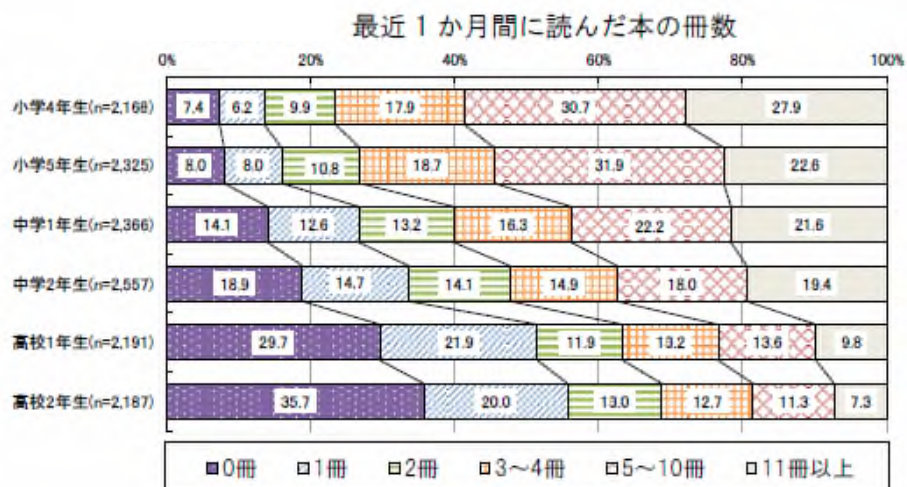
- ①中学生までの読書習慣の形成が不十分なことから、発達段階に応じた効果的な取り組みを推進する。
- ②友人同士で本を薦めあうなど、読書への関心を高める取り組みを充実させる。
- ③情報環境の変化が子どもの読書環境に与える影響について、実態把握と分析が必要である。

1) 「子供の読書活動の推進等に関する調査研究」(文部科学省 H29. 3) からみた課題

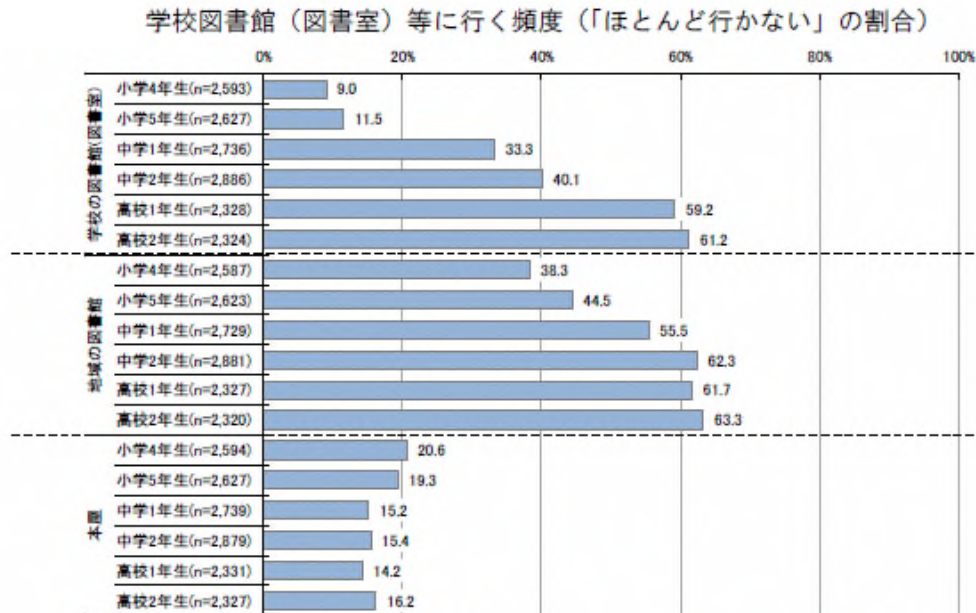
調査対象	有効回答件数	内訳等
小学生	5,300	119校の児童4年生2,633件、5年生2,667件
中学生	5,749	111校の生徒1年生2,773件、2年生2,916件(学年無回答60件)
高校生	4,812	69校の生徒1年生2,364件、2年生2,382件(学年無回答66件)

①子供の読書活動の実態

- 学校段階・学年が上がるにつれて本を読まなくなるという傾向がある。

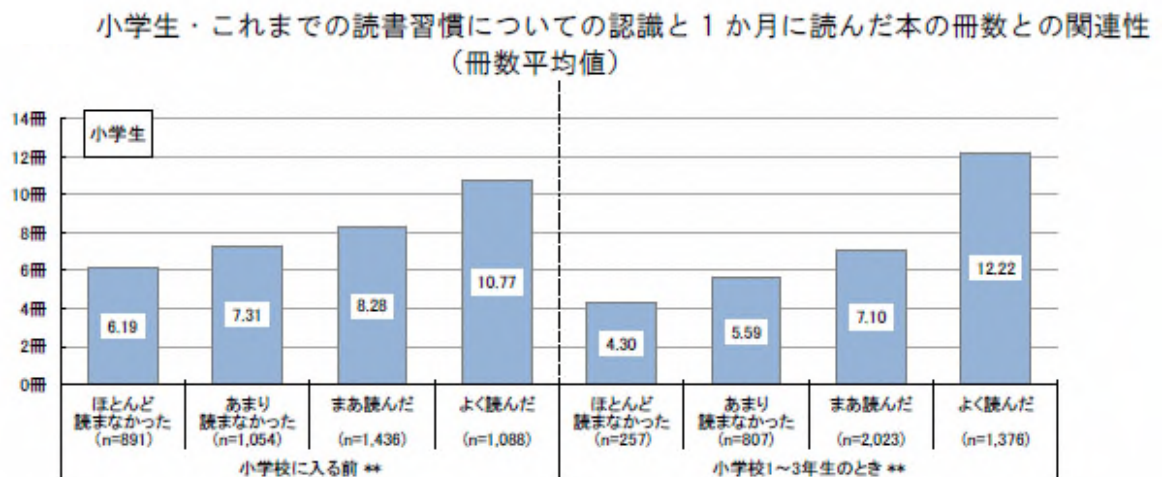


- 学校図書館（図書室）・地域の図書館の利用状況は、小学生は利用している様子が見えるが、高校生では利用しない生徒が多い。

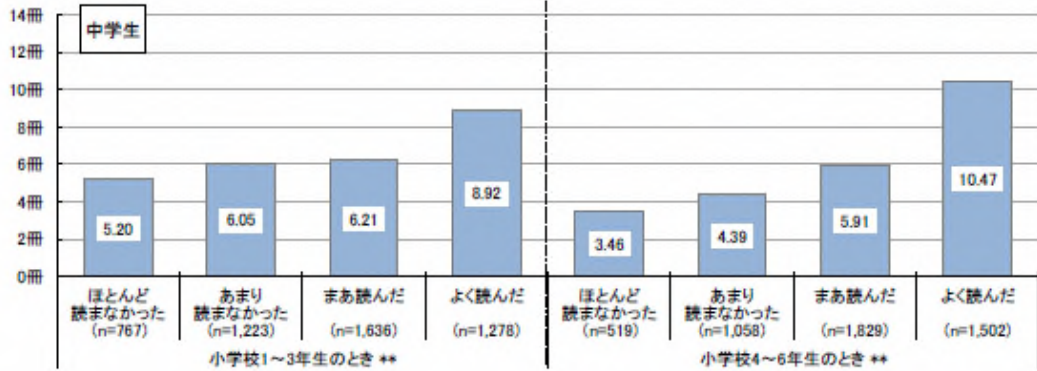


※それぞれ、「ほとんど行かない」の回答割合を掲載した。無効回答は除いて集計した。

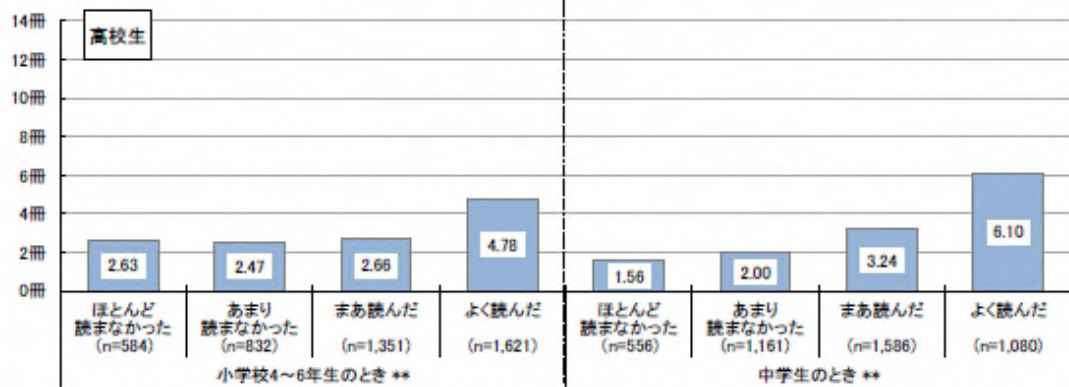
- 過去に読書習慣があった児童・生徒ほど、現在もよく本を読んでいるという関連性が見られる。



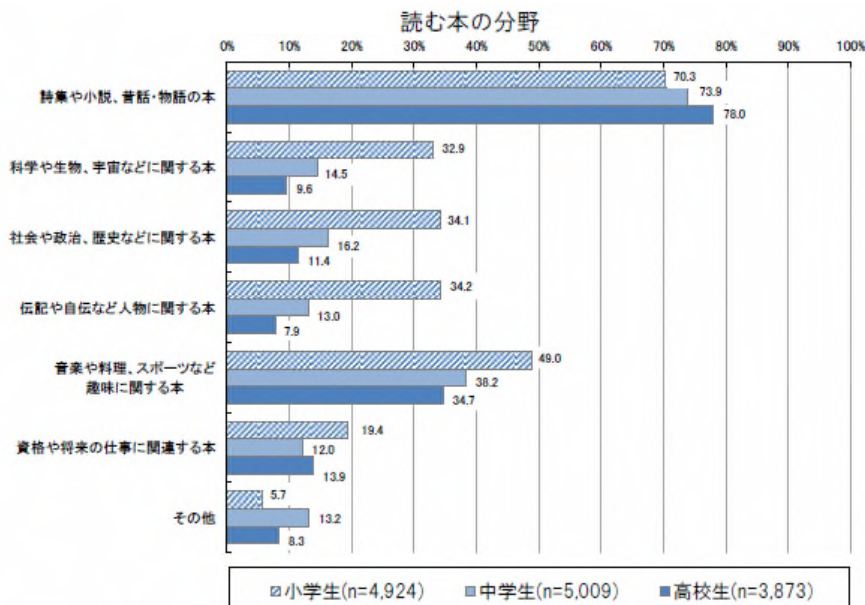
中学生・これまでの読書習慣についての認識と1か月に読んだ本の冊数との関連性
(冊数平均値)



高校生・これまでの読書習慣についての認識と1か月に読んだ本の冊数との関連性
(冊数平均値)



- 読む本の分野は、小学生・中学生・高校生ともに小説等物語の本や、趣味に関する本を読む割合が高い。

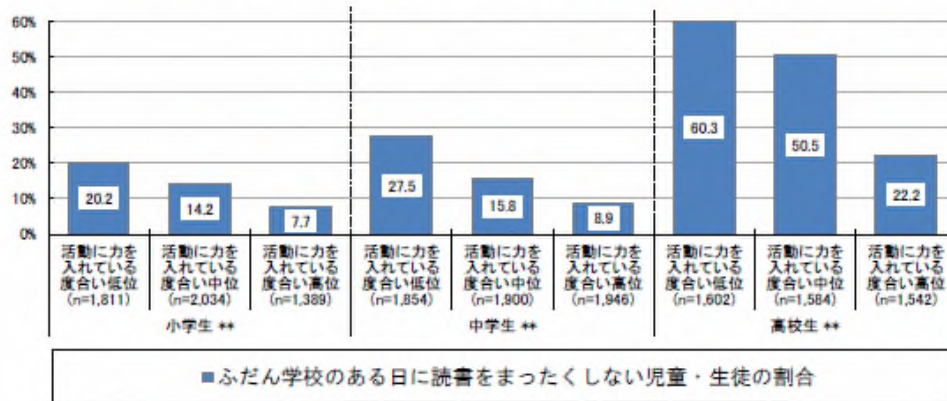


※それぞれ、「どれもあまり読まない」の回答と無効回答は除いて集計した。

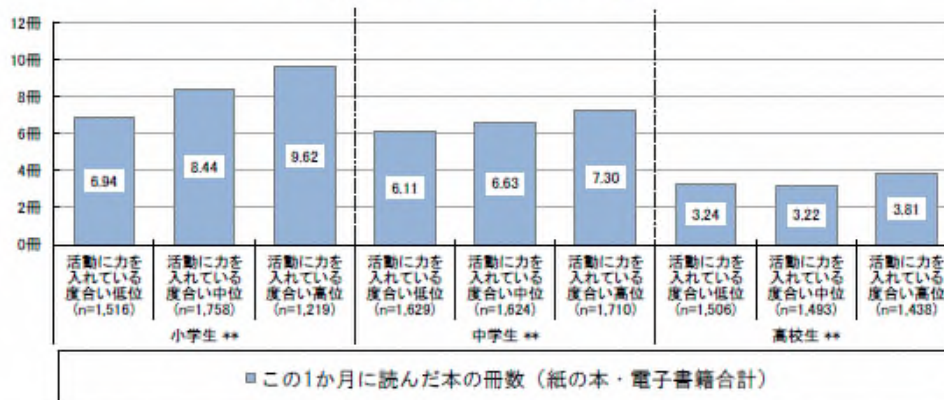
②子供の読書活動と学校での体制・取り組みや家庭環境等との関連性

- 小学校・中学校・高等学校ともに、概ね、学校で読書活動推進に関する体制が整備され、取り組みが実施されている学校の児童・生徒のほうが、本を読んでいる割合が高く、また、1か月の読書冊数が多い傾向にある

学校が読書に関する活動に力を入れている度合いに関する分類と読書習慣との関連性
(ふだん学校のある日に読書をまったくしない児童・生徒の割合)

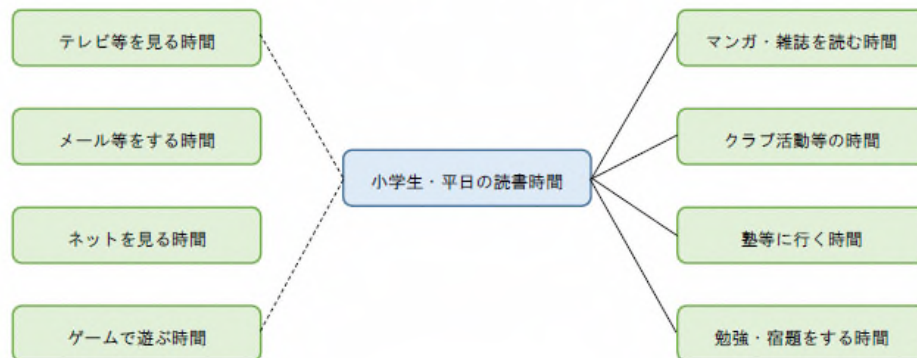


学校が読書に関する活動に力を入れている度合いに関する分類と1か月に読んだ本の冊数との関連性 (冊数平均値)

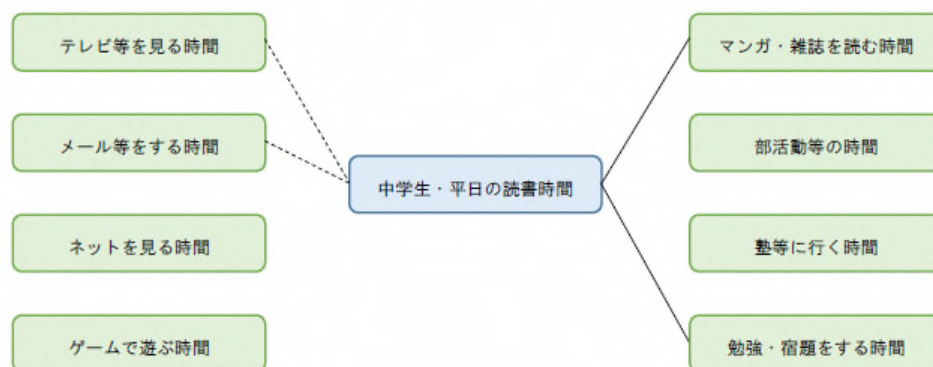


- 小学生ではテレビ等を見る時間が長い児童や、ゲームで遊ぶ時間が長い児童ほど読書時間は短い。
- 中学生・高校生ではメール等をする時間が長い生徒ほど読書時間が短くなっている。
- 小学生・中学生・高校生ともに、勉強・宿題をする時間が長い児童・生徒で読書時間も長いという関係が見られ、勉強時間は読書時間を阻害しているわけではない。

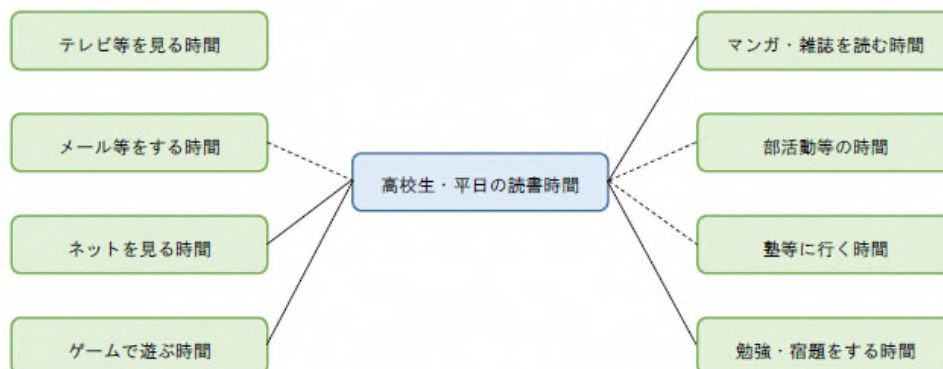
小学生のふだん学校のある日の時間の使い方と読書時間との関連性（相関関係イメージ図）



中学生のふだん学校のある日の時間の使い方と読書時間との関連性（相関関係イメージ図）



高校生のふだん学校のある日の時間の使い方と読書時間との関連性（相関関係イメージ図）

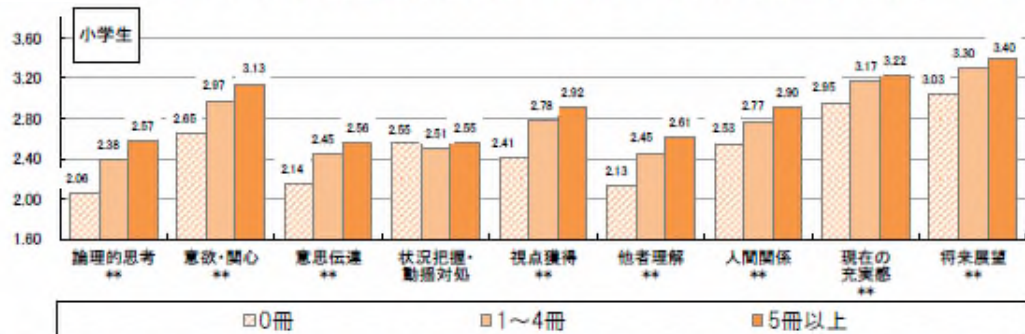


※2変数間の関連性が有意な箇所について、正の関係の場合は実線で、負の関係の場合は破線で線を結んだ。
※線が引かれていない箇所は相関係数が低いことを意味する。

③考察：読書活動による影響等について

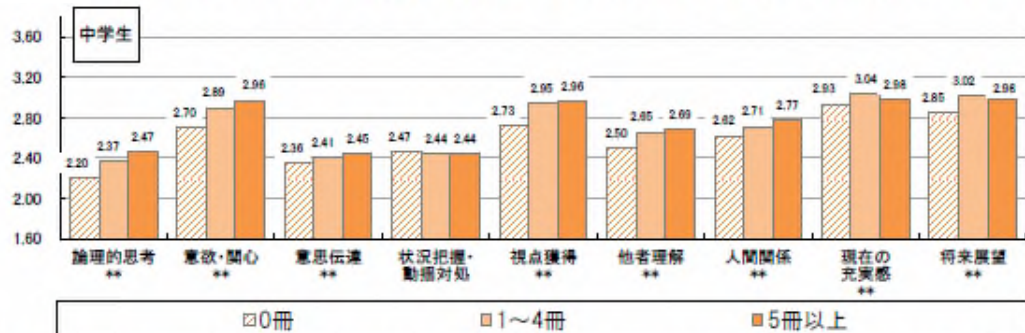
- 学力的側面や、他者との関係性に関わる意識等の向上に関して、小学生段階で読書をすることは広く影響を及ぼす。
- 「論理的思考」などについては、中学生・高校生の時点で読書をしていることと指標の水準との間に関連性がみられた。

小学生の1か月の読書冊数と意識・行動等に関する指標との関連性（平均値比較）



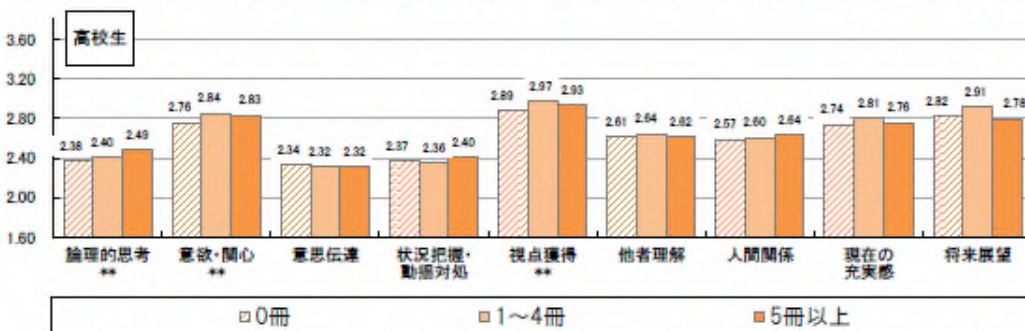
※一元配置分散分析により有意差が見られた点については意識・行動等に関する指標の名称下部に印を付した。（**：1%水準で有意、*：5%水準で有意、記号がついていない場合：有意差無し）

中学生の1か月の読書冊数と意識・行動等に関する指標との関連性（平均値比較）



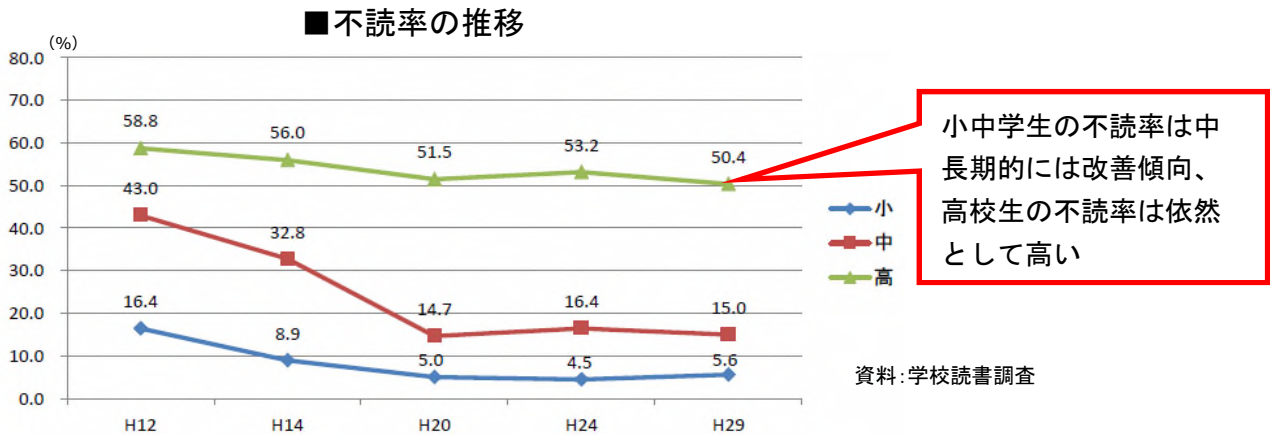
※一元配置分散分析により有意差が見られた点については意識・行動等に関する指標の名称下部に印を付した。（**：1%水準で有意、*：5%水準で有意、記号がついていない場合：有意差無し）

高校生の1か月の読書冊数と意識・行動等に関する指標との関連性（平均値比較）

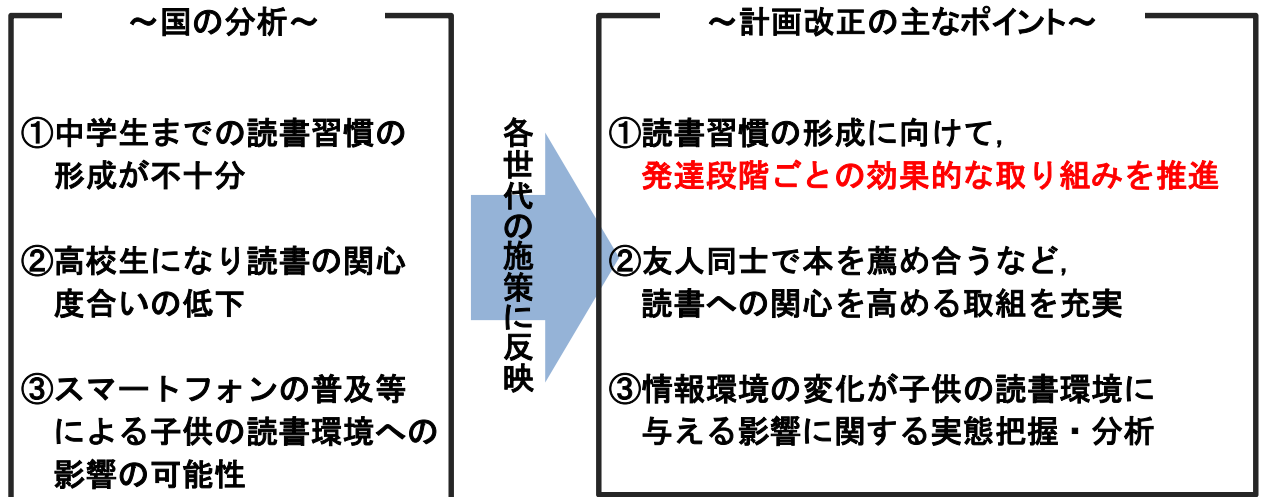


※一元配置分散分析により有意差が見られた点については意識・行動等に関する指標の名称下部に印を付した。（**：1%水準で有意、*：5%水準で有意、記号がついていない場合：有意差無し）

2) 第四次「子供の読書活動の推進に関する基本的な計画」関連資料から見た課題



3) 第四次「子供の読書活動の推進に関する基本的な計画」のポイント



○それぞれの子どもの発達段階に応じた読書活動の取り組みについて

① おおむね6歳まで

乳幼児期には、周りの大人からの言葉かけにより、乳幼児なりの言葉を聞いてもらったりしながら、言葉を次第に獲得していくとともに、絵本や物語を読んでもらうことなどによって興味を示すようになる。

さらに様々な体験を通じてイメージや言葉を豊かにしながら、絵本や物語の世界を楽しむようになる。

② 小学生の時期

低学年では、本の読み聞かせを聞くだけでなく、一人で本を読もうとするようになり、語彙の量が増え、文字で表された場面や情景がイメージできるようになる。

中学年になると、最後まで本を読み通すことができるこどもとそうでないこどもの違いが現われはじめ、読み通すことのできる子どもは、自分の考え方と比較して読むことができるとともに、読む速度が速くなり、多くの量の本を読むようになる。

高学年では、本の選択ができはじめ、その良さを味わうことができるようになり、好みの本の傾向が現れるとともに読書の幅が広がり始める一方で、この段階で発達がとどまったり、読書の幅が広がらなくなったりする者が出てくる場合がある。

③ 中学生の時期(おおむね12歳から15歳まで)

多読の傾向は減少し、共感したり感動したりできる本を選んで読むようになる。自己の将来について考えはじめるようになり、読書を将来に役立てようとするようになる。

④ 高校生の時期

読書の目的、資料の種類に応じて、適切に読むことができる水準に達し、智的興味に応じ、一層幅広く、多様な読書ができるようになる。

※「(第四次)子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」(第4章子供の読書活動の推進方策1発達段階に応じた取り組み)より要約